

高度情報化と現代社会理論
—— ポストモダンの社会学理論の検討 ——

小林 修一

理論社会学研究室

High Informationalisation and Social Theory Today
—— Thinking on Sociological Theory of Postmodernism ——

Shuichi KOBAYASHI

Sociological Theory

Abstract

This article aimed to discuss on the sociological theories which were affected by high informationalisation and postmodernism. I tried to show a rough sketch which made clear the relation among sociological theory, postmodernism and high informationalisation. J. Habermas, N. Luhmann, A. Giddens, J. Baudrillard and P. Bourdieu found out the limit of the modern social theory. And they had a try reforming the social theories respectively. To clear their theoretical reforming, I tried to form a connection with them concerning high informationalisation and postmodernism.

1 はじめに

ボードリヤールは、1970年代末に、現代社会はその目に見える社会「ラ・ソシエテ la societe」を社会たらしめている「社会的なるもの」ル・ソシアル le social の終焉を遂げつつあると主張していた。この「ル・ソシアル」とは、社会自らが準拠する自己イメージであり、近代社会はそれを「社会契約論」によって表明された原理とみなしてきたとされる。（近代以前にはそうした社会自身による捕らえ返し=reflection はなかったとされるが、人々の社会的アイデンティティと社会的リアリティの保証装置としての『共同体 com-

munity』的機制は存在した)。しかしながら、この至高の個人という存在から出発して、彼ら相互の（契約）関係によって成立すると観念されていた社会的なリアリティは、個人の至高権に基づく固定的、絶対的なアイデンティティの消滅とともにすでに存在しえなくなっているというのである。

こうした指摘は、今日のさまざまな、いわゆるポストモダン思想において主張されているところであり、私たちはさほど驚くこともなく、それを受け入れつつある。だが、この指摘が現実の変化をそれなりに正しく捕らえているものであるならば、そこから波及するさまざまな社会理論的に重大なテーマは、緊急の再検討を要するものとなる。それは、近代的な社会理論をめぐる、世界観的前提から、理論的パラダイムを構成する、いわゆる「個人-社会」関係や、近代人のアイデンティティと近代社会のリアリティを支えてきた「信憑性」の問題、さらに方法論的枠組みなど、理論的契機のすべてにわたる、根本的な洗い直しを迫るものである。

むしろ、そうした理論的革新の試みがなされていないわけではない。逆に、社会理論の領域でも、従来のシステム論や構造主義、マルクス主義、現象学、記号論のパラダイムの革新をめざしつつ、具体的な理論化の試みがなされてきている。にもかかわらず、ポストモダン思潮という一貫した潮流に対する、それぞれの試みの位置付けはなお不明瞭であるだけでなく、場合によっては、表面的に見るかぎりでは相互に矛盾し合う主張が入り交じっているというのが、おおかたの印象ではあるまいか。そもそもポストモダンとは、そうした多様性を承認し合う思潮であるというだけでは、理論的混迷に拍車をかけることにしかならない。なんらかの理論的整理に基づいて、それぞれの試みの相互批判と批評のための舞台をしつらえる必要がある。

言うまでもなく、あらゆる思想、理論は、自らの歴史的蓄積を含む社会的・文化的背景を持ち、そこから自らの課題と方法、解決の糸口を見いだしてきた。それらは最も包括的な『知』—すなわち、単に真偽の基準に則った学問的知識というだけでなく、人々の生活に欠かせない社会、文化、政治、経済、芸術などの諸領域を構成する実践的な『知』(savoir)—の上に成り立つものである。現代思想は自らを支える土壌である、その『知』について極めて自覚的、自己省察的な構えを取っており、それだけ、それぞれの理論化について共通の座標系を当てはめることが至難となっているのである。しかしながら、「『知』について極めて自覚的、自己省察的」であるということ、言い換えれば、自らの立脚点そのものを限りなく相対化する能力をもつという点での共通性こそ、ポストモダン思潮が生まれてくる土壌の今日的特質をなすものであるといえよう。フーコーが言語を、それを意味と結びつける主体と切り離して、〈énoncé〉言表のレヴェルから『知』の編成そのものを狙上に載せる場合にも、マクルーハンの「メディアはメッセージである」と主張する場合にも、それらはともに、従来自明視されてきた『知』のあり方そのものを問うための工夫なので

ある。彼らは言語と意味とを結びつける「主体」という近代的呪縛から身を引き離すことを企てたといえよう。そして、ボードリアールの「ル・ソシアル」の解体とは、その呪縛のほころびが私たちの日常世界にも蔓延しつつあることの指摘なのである。このことは、現代の社会と社会理論そのものの根底的な変容の契機が『知』とその編成にあることを示している。この点で、M・ポスターが指摘するように、『知』の組み替えに大きな影響を与える『高度情報化』とポストモダン思潮との関連は、現代社会理論の基盤そのものに関わることがらなのである。

本論は、今日の多様な社会諸理論を、社会の情報化に基づく『知』の再編成に関わらせて整理することを試みるものである。むろん、この課題はこの小論の枠内で論じ切れるような瑣末なものではないし、筆者にその課題遂行のための十分な準備や能力があるわけでもない。したがって、とりあえず、ひとつの整理の試みとして提示するものである。

2 『知』の変容とポストモダンへ

2-1 生活空間と電子メディア

私たちの日常生活は時間的、空間的な境界によって「仕切られている」、というか「仕切られていた」。例えば、近代以降の住居の意匠は、公的世界と私的世界との峻別を反映し、玄関と敷居などの存在がそれを裏づけていた。外部からの訪問者は玄関前で訪問の声を挙げ、新聞は境界上にしつらえられた「新聞受け」に入れられる。電話も普通玄関の上がり口に据えられており、やはり外部からの「訪問者」扱いを受けてきた。しかしながら、多様な電子メディアの家庭内への侵入は、こうした伝統的な境界を解体しつつある。テレビジョンの居間や個室への侵入について問題視されたのはすでに昔のことである。今や、各部屋に持ち込まれる無線電話から、いつでもどこでも呼び出される携帯電話、テレビやテレフォン・ショッピング、パソコンネットワークによる在宅勤務、光ファイバー・ケーブルを用いての遠隔テレビ会議や授業など、近代的な生活空間を有意味的に仕切ってきた境界はますます融解し、生活の諸領域が互いに融合しつつある。公私や仕事と余暇、これらを峻別することによって成り立っていた生活は時間的・空間的に極めて流動化し、融合し合ってきている。その契機こそ、電子メディアにほかならない。

むろん、シュッツの指摘を待つまでもなく、これまでも、「客観的」な物理的時空間とは別に、私たちの生活は多元的な意味的時空間として成り立っていた。家庭、学校、職場、遊園地、映画館から喫茶店に至るまで、私たちは複数の人格を演じ分けつつ、複数の意味的世界を生きてきた。しかしながら、そうした時空間は基本的には「客観的」な物理的時空間に準拠して構成されるものであり、私たちは家庭に居ながらにして映画館に居ることは出来ず、職場に居ながらにして、航空機に乗ることは出来なかった。しかし今やこれらが同居し始めているのである。ちなみに、ルワンダの難民についての昨日ビデオに採って

おいた映像を見ながら、遠方の知人と近況について無線電話で会話しつつ、テーブルからビールのグラスを手取る私にとって、シュッツのいう「至高の現実」は極めて相対化されたものとなってしまった。私は視覚的にはルワンダの人々の世界に生き、聴覚的には遠方の知人と共におり、味覚的(?)には、この自分の部屋にいる。時間的にも数か月前のルワンダの、20時間前に放映された映像を見ていることになる。ここーそこーあそこといった均質の空間的な広がりや、過去ー現在ー未来といった同様に直線的な時間の流れに対する準拠はここにはない。物理的な時空間を越えた複数のリアリティが今ここに同居し、ひしめきあっているのである。同様に、三次元的な時空間の中心には「近代的」主体が存在するはずであった。「今」「ここ」に存在する「自我」を中心として遠近法的に描きうる生活世界は、かけがえのないものとして、ただひとつ存在するはずであった。しかしながら、私はリアルタイムに複数の私を生きている。

ところで、メディアによって媒介された世界もまた、かつて自明と考えられていた実在性を失いつつある。ルワンダ難民の映像の合間に流されるCMはまた別の世界を繰り広げている。その映像は自己完結的で、その向こう側の「生の」世界は虚でしかない。M・ポスターは、これこそ口頭や文字のメディアと対比的な電子メディアの特質であると指摘している。すなわち、(1) 文脈の不在、(2) 独白性、(3) 自己指示性の3点である⁽¹⁾。これは、記号はある実在を表象するという私たちの常識を打ち破る事態である。しかしながら、シニフィエと分離された「浮遊せるシニフィアン」、照合対象不在の(オリジナルなきコピーとしての)「シミュラークル」といった、今やなじみのポストモダンの情報環境は明らかにそれらを体現するものなのだ。

「表象の危機は、……情報の爆発からだけ来るものではなく、その情報が流通する新しいコミュニケーションの構造から由来するものである。ある地点を越えて送り手と受け手との距離の増大は、送信者と発信者、メッセージとそのコンテクスト、受信者／主体と彼あるいは彼女自身の表象などの間の関係の再布置化を作り出すようになった。……(しかも)科学と権力、国家と個人、個人と共同体、『権威』と法、家族の成員同士、消費者と小売り業者などの間に新しい関係を課している」⁽²⁾。電子メディアは私たちの生活空間、社会的世界を組み替えつつあるのである。

そして、この記号と記号によって表象される実物との関係の不在は、記号と照合対象との意味的關係の源泉であった「主体」の解体をも帰結する。すなわち、客観的実在と主観的主体との共犯に基づいて構成されていたリアリティから、その至高権が剥奪されたのである。唯一の特権的な実在に対置されるような「かけがえのない」主体は、現代の情報環境の中では限りなく多様化し、分散し、分解されざるをえないのである。

各種ニューメディア(CATV, VTR, パソコン通信, AV系ニューメディア, 電子ネットワーク)からマルチメディアまで、情報の伝達、処理、保存機能をもったメディア

やネットワークと情報の編成、編集が進められ、日本より一足早く実現に向けて基盤整備が進められているアメリカ版「情報ハイウェー構想」の日本版も95年度予算で概算要求されることになった（「朝日新聞」94. 8. 27）。いわば、マルチメディアのリアリティ生成機能を情報ハイウェーによって加速化することが、国策として実行されようとしているのであるが、それがもたらす新たな現実、アイデンティティのありかたについてはほとんど予想すらできない状態なのである⁽³⁾。

2-2 近代的社会像の変貌

近未来的な情報環境の変質が及ぼす私たちの社会的存在様式への影響についてふれてきたが、その変質を前提としつつ、次に、社会理論の基礎をなす社会イメージと自然像との関わりに対する、情報化のインパクトについて検討をくわえ、社会理論のパラダイム転換の必然性に言及しておく。

一般に、近代思想の枠組みは、デカルトの心身二元論によって与えられたとされる。その場合、物理的身体から分離された純粋な「精神」＝理性としての「われ」と、その理性によって認識されるところの客観的对象世界とが峻別される。それゆえ、その「理性」的認識によって把握される限りでのみ、対象世界の存在は許されることになる以上、それは合理的な数学的表現をまとったガリレオ＝ニュートン的な機械論的自然像を帰結することになった。「自然は数学的言語によって書かれている」（ガリレオ）のであった。この等質的な空間の無限の広がり、直線的な時間の無限かつ不可逆的な進行とが、近代の機械論的自然像を基礎づける「絶対的時空間」にほかならない。

ついで、近代的社会理論の原像を提示したホッブスの『リヴァイアサン』では、自然のメカニズムはぜんまい仕掛けの時計の比喻によって語られ、したがって聖書に出てくる怪物の名である「リヴァイアサン」と称される社会そのものも「人工の生物」になぞらえられる。それはアトムとしての個人相互を組み合わせたものと観念されるから、その機械的な組み合わせ如何によってさまざまな機能をもたせ、全体の統合を図り、予測を可能にさせるものとなる。いわば「社会的秩序はいかにして可能か」といった課題を与えられた「理性」主体が、アトムとしての諸個人という素材をどう組み立てることによってこの課題に答えることができるか、その回答が『リヴァイアサン』にほかならない。そして、19世紀以降に人文・社会科学の諸領域に侵入した実証科学（心理学主義、社会学主義、歴史主義）の潮流はその正統な嫡子なのであった。

以上が近代的思想の機械論的特徴とその社会理論への適用の極めて大ざっぱな鳥瞰図である。だが、このニュートン的な物理学的自然像は20世紀に入ると、さまざまな難問に直面することになる。ちなみに、ロバチェフスキー、リーマンによる「非ユークリッド幾何学」の提唱はニュートン的な絶対的時空間の観念を転覆させるものであり、ゲーデルの「不

完全性定理」は数学的認識の絶対性の基盤を掘り崩すものであった。さらに、アインシュタインの「相対性理論」とハイゼンベルクの「不確定性原理」の提唱は認識主観から絶対的に峻別された純粋な客観的実在世界の存立不可能性を解き明かすことになった。このように、20世紀の自然諸科学の新たな発見はいずれもデカルト以来の近代的自然像とそこに準拠した思考の枠組みを動揺させ、相対化するものであった。

さらに、同じ20世紀は、ボードリヤールが19世紀の「産業社会化」としての第一の革命に続く、メディアによる「意味破壊」としての第二の革命、ポストモデルニテの革命と名づけた時代でもあった⁽⁴⁾。機械論的時空間に準拠した私たちの社会イメージの基盤=生活空間の編成に大異変が生じたのである。すでに触れたように、近代社会の特質として挙げられている「社会の再帰性」とは、私たちの社会についてのイメージは、単に図式的に与えられたものとして存在するのではなく、まさに日常の経験の中で、経験に照らし合わせて再解釈されつつ、蓄積され、社会的実践（プラチック）として社会を構成する力となるのである。つまり、均質で無限の広がりを持った空間と、直線的かつ不可逆的な時間といった物理学的時空間に準拠した社会についてのイメージは、日常の経験にそぐわないような状況の出現によって初めて私たちの社会的イメージの革新へと移行し、新たな社会理論をめざすパラダイムの転換を準備するのである。パラダイム転換は社会的に偏在する『知』の組み替えによって準備されるのである。

つまり、空間における物理的性格を打破し、日常的な生活空間の多元化と断片化を押し進め、不可逆的時間を可逆的、操作的なものへと圧縮し、分断し、同様に多元化してしまう、そうした作用は電子的メディアの登場によるものであった。イタリアの哲学者A・メルッチはこうした日常経験の移行を『産業資本主義の（時空間についての—引用者）モデル』から『複合社会のモデル』への移行として記述している⁽⁵⁾。ここでいう『複合社会』が高度情報化が進み、私たちの日常生活が電子的メディアに浸透された社会を指していることはいうまでもない。

ここで、電子的メディアによる物理学的時空間からの離脱を可能にしたのは、記号と表象との自明視されていた結びつきのほころびにあったことに注意する必要がある。ポスターが指摘したように、言語・記号の自己指示機能の全面化は、シニフィアンの遊離とシミュラクルによる現実の生成を実現するものであり、それらは「語りかけられている主体と共に語っている主体を構成する形成的な、構造化するパワーである」⁽⁶⁾。かのデカルト的主客二元論はそれぞれの項がそれぞれの項に準拠することによって成り立っていたのだが、電子メディアによって創出される世界にあっては、双方が共に他方の呪縛から解放され、自由に遊離し、拡散し、脱中心化されることになる。近代社会の中心的モデルをなす『社会契約論』的社会観を支えてきた《社会》と《個人》の相互準拠の機制もまたこの世界では崩壊せざるをえないのである。

2-3 構造主義的パラダイムからポストモダンへ

こうして、伝統的な《社会》と《個人》の関係をめぐる「社会実在論」と「社会唯名論」との偽りの理論的対立は、実体的な諸項をあたかも実体的なものたらしめているメカニズム＝「構造」の発見によって無効化される。すなわち、近代的思考の二元論的構図は各項の実体化＝中心化に基づく「物理学的客観主義」と「超越論的主観主義」、「唯物論」と「観念論」との同様に偽りの対立を生み出したが、それらはいずれにせよ、「実体論的」発想から生じた双生児なのである。

「実体の第一次性、関係の第二次性、これが近代思考図式の根本である。……実体はそれ自身で存立するという規定をうけたように、実体は世界を見る(かかわる)固定点(フィックス・ポイント)である。固定的なレファラン(準拠点、座標系)となり、すべての現象をそこへと還元する出発点となる。主体は実体であり、実体は主体である。近代主体主義は、固定点の思想であり、絶対的出発点＝起源をもつ思想である」⁽⁷⁾。

近代思考図式の基礎にある、物理学的世界観＝ニュートンの絶対空間・時間論を独自の「生活世界論」から相対化したのは後期フッサールであった。しかしながら、現象学は実体論の相対化と批判のための視角を提示することはできても、実体論に替わる新たなパラダイムに基づく社会理論の構築をなし遂げたとはいえない。積極的な社会理論の構築は「構造主義」のパラダイムに基づく「関係論的思考」を、何らかのかたちで出発点としているのである。そして、構造主義は自らの思考モデルとして、これまでの有機体論的もしくは機械論的な「実体的」モデルの適用を破棄し、言語という「関係論」的モデルを採用した。そして、そのルーツは「言語のなかにあるのは差異のみである」とする、ソシュールの言語学である。それはいうまでもなく、言語をその外部の実在を指示する目録とみなす「言語命名論」を否定し、それゆえ言語と外的実在との表現の関係を「意味」とする考えにも与しない。それらは言語を「関係」としてではなく、外的実在に対応した別の実体とみなす近代思考図式に則った見方でしかない。ソシュールによれば言語以前にはそれが表象するとされる対象は存在しない。同様に、言語記号を構成するとされる2つの契機、すなわちシニフィアンとシニフィエもあらかじめ独立して存在する2つの実体なのではなく、記号＝差異の成立とともに、関係の項として生成するのである。

差異関係がまず成立し、そのことに基づいて諸項が自立化するのであって、その逆ではない。これが、ソシュール言語学をモデルとした構造主義の基本的発想であり、近代思考図式を転覆し突き崩すパラダイムの核なのである。この発想はレヴィ＝ストロースによって親族関係の「構造」や神話の「構造」分析へと応用され、従来のも物語テキストを作者(＝主体)とその意図(＝意味)との関係として現れる表層に対する、テキストを構成するコードの関連である深層の「構造」に着目させることになった。前者は後者のいわば「効果」として成立するものだからである。

このように、記号と意味、シニフィアンとシニフィエとの関係についての実体論的理解からの離反は、すでに触れたフーコーによる表象と語る主体からの言葉の切断、すなわち〈énoncé〉「言表」への遡及においても示されている。いずれも近代思考における実体論的発想と主体の形而上学の解体を象徴するものである。

また、とりわけフーコーの問題領域であったが、西欧近代における「語る主体」の中心化のような、ある特定の価値(生産、効率、人間など)を準拠点として中心化することは、例外者や離反者の抑圧と排斥といった権力の生成がつきまとう。それこそそうした中心的価値によって正統化される権力の定立にほかならない。そこから、フーコーは、近代的主体(サブジェクト)を、そこからあらゆるものが生成する起源とみなす近代思考の枠組みから解き放ち、権力的中心に対して「服従」(サブジェクト)する主体へと転換することになるのである。

構造主義のパラダイムが、近代思考の枠組みを根本的に解体し、「関係論」的な『知』の組み替えを敢行した点である点は明らかであろう。ポスト構造主義、ポストモダン思想と呼ばれる現代の諸思想や理論は、この「関係論」的で脱中心化的な地平を共有しつつ、その近代思想の枠組みへの誤った吸引から身を遠ざけるかのように、さらなる徹底化を企てるものといえよう。

その方向性は、リオタールの『ポストモダンの条件』に典型的に示されている。リオタールによれば、モダンの思想とは、自らの正当化のために『大きな物語』(「精神」の弁証法や、意味の解釈学や理性的人間、労働者の解放、富の発展など⁽⁸⁾)に準拠しようとするものである。それはコンセンサスや中心、同一化への傾斜をもつものであるが、これに対して、ポストモダンの発想は異質性や脱中心化を特徴とする。「それは差異に対するわれわれの能力をより強くするのである。ポストモダンの知は、その根拠を専門家たちのホモロジー(homologie)のうちに見いだすのではない。その根拠は、むしろ発明家たちのパラロジー(paralogie)のうちに見いだされるのである」⁽⁹⁾。この『大きな物語』が、西欧中世における神学的世界像のイデオロギー的代替物を意味することはいうまでもない。モダンとは、すでに失われてしまった夢を夢見ることの許された時代なのであり、そうした錯視を可能とする枠組みが存在しえた時代であったといえよう。しかし今やこうした「ノスタルジー」そのものが失われた時代であると、リオタールはいう。そして、ポストモダンとは、そのことを「幻滅」するのではなく、『異質なもの』を積極的に受け入れ、承認するところに成り立つ。これが、彼のいう『ポストモダンの条件』にほかならない。「構造」概念が固定的なものとして中心化されようとする、すかさず「構造」の外部、その網の目からはみ出す余剰に注目し、そこからさらに「構造」それ自体を脱中心化しようとする(=ディコンストラクション)、絶えざる脱中心化、差異化への運動、こうした志向をここではポスト構造主義、ポストモダン思想とっておこう。

しかも、このリオタールの「パラロジ」 という正当化のモデルは、いわゆるポストモダン科学と呼ばれる決定不能なもの、不確定で制御不能なものに關与する「カタストロフィーの理論」や「フラクタル理論」における未知なるもの、異質なるものの創出に基づく遂行のためのモデル化によって影響されており、今日の熱力学の「散逸構造」「シナジェティックス」、生物学の「オートポイエシス」などの知見は、モダンの科学における「客観主義」、「決定論」、「因果論」そして「進化論」などから導き出される機械論的な秩序観に対して、「自己組織的」な新たな秩序観を準備するものとして注目されてきている。これは近代的世界像に基づく機械論的な生命体や社会の秩序に対して、あきらかに「脱中心化」的でパラロジカルな秩序の生成原理のモデルを提供すると考えられる⁽¹⁰⁾。一定の平衡状態を前提として、その安定と変動の要因を探るといった、従来の秩序やシステムの見方に対して、マイクロレベルの「ゆらぎ」の増幅がマクロレベルでのパターンの出現をもたらし、全体的秩序の自己組織化を帰結すると見るわけである。このような秩序形成のありかたは、中心からの、一定の目的をめざす「統制」としての「秩序」観とは、あきらかに相容れない。それはポストモダンの原理を象徴するものとみなされる。「ポストモダンの場面とは、成果を志向したコントロールではなく、差異化と意味の自己編集が支配する世界である。……ポストモダン現象とは、差異の分節化によってモダンの『大きな物語』を崩していく試みであり、意味充実を果てしなく求め続けるリゾーム運動体に近いものである」⁽¹¹⁾。

そして、こうしたパラロジカルな秩序の生成は、私たちの情報環境において、典型的にはマルチメディアの広範な普及に基づく個別的なリアリティ形成の場面として想定することができるかもしれない。アメリカの「情報スーパーハイウェイ構想」やその日本版「構想」が、「パッケージ型」マルチメディアの家庭内への浸透から、「ネットワーク型」システムの普及、さらに「シアター型」システムの街頭への進出などに拍車をかける可能性は大である。そこで繰り広げられるハイパーリアリティとバーチャルリアリティの多様な演出が、ひとびとの社会イメージをどのように作り変えてしまうのか、そしてひとびとのそうしたイメージに基づく「再帰的」行動がいかなる社会と社会理論とを導くのか、ポストモダンの実験はまさにこれから始まろうとしているのである。

3 ポストモダン社会学と情報の問題

3-1 ハーバーマスとポストモダン論争

ところで、社会学におけるポストモダン論争の中心的存在となったのは、ハーバーマスであった。ルーマンとの論争や、彼らにたいするリオタールの批判から、ギデンスの考証に至る「モダンとポストモダン」をめぐる議論のうちに、現代の文化と社会の特質と、それにたいする高度情報化のインパクトの意義、さらに社会学理論構築のための新たなパラダイムへの展望など、主要な問題群がほぼ出揃っている。

ハーバーマスに対してモダンと啓蒙主義への思想的対応をせまったのは、アドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』⁽¹²⁾における「近代のパラドックス」論議であった。彼らによれば、西欧近代の啓蒙的理性とその進歩といったユートピアは、結果的に人間による神の追放と人間中心主義を生み出し、それは、宗教的ドクサからの人間の解放をもたらした反面、いまなおこのドクサに浸る非西欧人に対する西欧人の支配の正当性を供与するものであった。このパラドックスに直面した時、『啓蒙の後裔』たる現代の知識人のとるべき途は2つしかないというのが、ハーバーマスの問題提起である。すなわち「今なお基本的見解の岐れ目はどこにあるかといえ、こうした啓蒙主義の志向—それがいかに脆弱なものであろうと—を守って行くのか行かないのかということ」⁽¹³⁾だと。

ハーバーマスの採る途は前者である。というのも、彼によれば、18世紀の啓蒙主義が提唱したモデルネの企ては、現在も完成途上にあるからであって、学問、芸術のみならず、道徳的進歩や世界と自我についての理解の深まりなど、なおそうしたビジョンの実現がわれわれの課題として残されているのである。そこで、ハーバーマスは「近代のパラドックス」を回避するとともに、近代理性=合理性に基づく人間解放という啓蒙本来のプロジェクトの実現をめざし、「近代のパラドックス」を導く（対自然的な）道具的理性から区別された（対他者的な）コミュニケーション的合理性を提示することになる。

それは同時に、人類史の形成原理として社会的労働をかけた、人間解放の理念をめざしたマルクス主義の理論的革新を企てた結果でもあった。彼によれば、支配関係を除去した「理想的発話状況」に準拠する合理性概念によって、生活世界のコミュニケーション行為は新たな「正当化」を獲得することができ、いわば「病めるモデルネ」としての現代社会批判の立脚点を保持することが可能となる。現代社会は、生活世界から自立した「科学・技術」と「法・道徳」の世界が、言語的メディアを介した了解とは掛け離れた、「貨幣」と「権力」のメディアに基づくシステム世界を構築してしまい、「システムによる生活世界の植民地化」を押し進める事態を生み出したのである。そこから、対話的理性=コミュニケーション合理性に基づく「生活世界」対機能合理性に基づく「システム世界」といった二項図式が現代批判の枠組みとして提唱されてくることになる。すなわち、啓蒙理性の継承者としてのコミュニケーション合理性と「生活世界」の擁護、そこを立脚点としたシステム世界の統制こそ現代の最大課題であり、啓蒙のプロジェクトの完成をめざす企てにほかならないのである。

ところで、ハーバーマスにとって「近代のパラドックス」の根拠は「システム世界」の自立化とその「生活世界」への侵入にあるとされ、その事態を回避するためにも「啓蒙的理性」は伝家の宝刀として位置付けられることになった。これに対して、リオタールは「近代のパラドックス」の根拠こそ、そうした「理性」や「解放」、「進歩」といった『大きな物語』（=中心性）への準拠にあるとし、「啓蒙的理性」そのものを告発することになる。「普

遍的」と称されるような真理的価値をめぐるひとびとの間のコンセンサス＝コミュニケーション的合意の樹立は、その合意からはずれた例外者を作り出すとともに、その抑圧と排斥を必然的に生み出すものであって、それこそ「近代のパラドックス」にほかならない。ハーバーマスの「啓蒙理性」再構築の企ては、あらたな「近代のパラドックス」の再生にしか行き着かないことになる。

こうしたリオタールのハーバーマス批判の根底には、「モダン／ポストモダン」をめぐる評価の違いがはっきりと表明されている。リオタールの「パラロジ」の戦略こそ、ハーバーマス流の「啓蒙理性」や「コンセンサス」、「全体性」「同一性」といった『大きな物語』を脱中心化し、モダンの抑圧機構の無化をめざすポストモダンの戦略なのであった。したがって、リオタールにとって、現代はすでにポストモダンに向けて離陸してしまった時代にほかならない。なぜなら「失われた物語に対するノスタルジーそのものが、もはや多くの人々にとっては失われたものになっている。それは、彼らが野蛮へと回帰したことにはならない。彼らがそうならないのは、正当化というものが、彼らの言語的实践やコミュニケーションの相互作用以外のどこか別の場所からやってくるのではないということを知っているからである」⁽¹⁴⁾。

このように、ポストモダンをめぐる論争は、「近代のパラドックス」の根拠をどこに見いだすかの見解の違いが基底となっていることが分かる。ハーバーマスとルーマンの論争の場合にもこのことはあてはまるが、ルーマンのシステム論における「パラダイム革新」の意義もまたこの点から明らかとなる。

ルーマンが自らのシステム概念を、パーソンズのシステム概念に対比することでシステム論における「パラダイム革新」と主張する根拠としているのは、パーソンズの全体システムとその統合といった発想のモダン性であり、これに対するシステム論における「脱中心化」という自らの試みにある。パーソンズにとってのシステム統合の課題は、そもそも自我と他我との「期待の相補性」、すなわち、自我は自らの役割行為を他我の期待に適応させる必要があり、同じことが他我の側にもあてはまる場合、この基本的な二重の偶発性をいかに解決しうるかという問題として現れた。パーソンズが採った解決策は自我と他我間のコンセンサスを保証しうる「価値の共有」ということであり、一種の外挿法によるものであった。ルーマンからすると、このような価値的中心に基づく全体システムの統合こそモダンの発想に導かれたものでしかない。

ルーマンによれば、社会や自己、行為などからなる私たちにとっての「現実」とは、その背後に規定不可能な地平として広がる「世界」の複雑性に対する、選択的な働きかけ（＝複雑性の縮減）の結果として意味的に構築されたものである。それゆえ、彼のシステム観も、パーソンズの場合のような全体／部分といった境界づけや、全体に対する部分の従属といった実体的関係の下に置かれるようなものとは異ならざるを得ない。システムは自ら

の存続のために複雑性に満ちた環境のなかで、自発的な選択的働きかけを通じてシステムの境界づけを行い、自己と環境との差異＝情報を採り込み不断の自己更新（＝オートポイエシス）を実現することになる。こうして、ルーマンのシステム論には、全体の維持・存続といったシステム目標はなく、したがってそうした目標をめざしたサブシステムの協同性に基づく調和もない。そこには全体／部分、世界／主体といったモダンの二項的発想は見られず、あるのはただ諸システムの際限のない自己言及的な自己再生の活動でしかない。これをシステム論における「パラロジカル」な転換とみることができよう。ルーマンによるシステム論の「パラダイム転換」の核はここにある。

このように、システムそのものが自己同一的な実体性を失い、何らかの確定的な基礎付けを持たない以上、そこではハーバーマスの「システム对生活世界」といった二項図式は意味を持たないものとなる。むしろ、そうしたシステムは「主体」や「理性」といった中心に準拠するわけでもなく、自己言及的な際限のない自己差異化の運動によって自己の再生を図るだけである。そこでは、ある中心によって正当化されず、根拠づけられない不確定な要因を抑圧したり、排除するといった「近代のパラドックス」そのものが成り立ちえないのである。

ルーマンは、こうしたシステム観に基づきつつ、社会的進化とはシステム分化＝自己差異化の増進であり、それゆえ複雑性の増大であるとする。そして現代社会は、この複雑性が極端に増大し、近代までのシステム分化のありかた、すなわち家族内の役割分化にみられるような分節化や、位階的序列の差異に基づく階層とは異なった、全体システムの統制のための中心なき「機能分化」に達した時代であるとする。いうまでもなく、この現代社会のシステム論的理解は、リオタールが特徴づけたポストモダンの発想を共有したものとなっている。その意味でも、ハーバーマスの理性的コンセンサスの再中心化の企てとは対極的なポストモダンの立場に立つといえよう。

ハーバーマスと、リオタール、ルーマンといったポストモダンをめぐる両極が分化しているように見られるが、この対立に対して、より現実主義的な視点から独自の切り込みをみせるのが、ギデンスである。彼は従来のシステム論における機能主義的偏向を取り除き、社会システムそれ自体の生産と再生産を可能としている原理としての「構造」に着目する。ただ、この場合の「構造」は、システムを構成する社会的諸実践を規定する規則と資源のセットである一方で、社会的相互作用による意味、規範、権力の生産を媒介するものでもある。いわば「構造」とは社会的相互作用による社会システムの生産と、社会システムによる社会的相互作用への規定性との循環を可能とする媒介的原理であり、ギデンスはこれを独自の『構造化』原理として提唱するのである。この概念の導入は、方法論上の実証主義／理想主義、全体主義／個人主義といったモダンの二項図式に由来するアポリアの無効化を企てるものである。

ギデンスのこうした「構造の二重性」の観念は、人々の社会的行為における「再帰的モニタリング (=監視)」、すなわち行為者が自らの行為の文脈についての知識を持ち、それを自らの行為において反省的に取り込むという特性に対応している。彼はこの本来的に自己言及的な行為のありかたから、現代はなおモダンの行為様式の延長線上に位置付けることができるかと主張している。

というのも伝統的社会にあっては、そうした行為の根拠づけ=理由の自己理解は「過去の経験」に基づいてなされるのが常であったが、近代社会におけるそれは変動やまぬ「情報」に依存しており、現代はその「情報」の獲得とそれに基づく行為の吟味と修正=モニタリングとのサイクルが極めて高速化した時代とされるからである。つまり、情報化の進展を前提として成り立っている近代的な行為様式が、現代においては物理的時空間を越え、人々の方向性を失った際限のない「モニタリング」によって全面開化したことになる。ギデンスはこうしたモダンの末期的趨勢をジャガノートとよばれる超大型の長距離トラックの猛進になぞらえている。

ギデンスによるモダンの規定は、それゆえハーバーマス流の「啓蒙の精神」といった理想主義的な色彩とは本来無縁な、極めて社会学的な現象理解に基づくものである。すなわち、情報によるモニタリングは「現実には理性を打破していく」⁽¹⁵⁾のものであって、そこには啓蒙主義的な理性人の面影はみじんも見られない。さらに、情報環境の拡大は、ローカルな限定から行為を解放しグローバル化するとともに、社会システムの「脱埋め込み」=物理的時空間の制約を抜け出したシステムの構築を実現するものである。そこから、モダンの進展は、ハーバーマスのいう「生活世界」そのものの変容を引き起こし、固定的な「システム/生活世界」の二項図式を無効化することになるだけでなく、人々の日常生活行為はますますシステムについての専門的知識や情報に基づくモニタリングによって展開されざるをえないのである。

ギデンスによれば、現代社会はなお原理的にモダンの最前線にとどまっており、人々の社会的行為はモダンとは別の原理によって嚮導されるにはいたっていない。その意味では現代はなおモダンのかなたへと飛躍した時代とはいえないが、この「ジャガノート」のばく進は、ハーバーマスの二項図式を無効化するほどに社会的諸領域相互の浸透、融合を結果しており、モダンの社会理論の射程をはるかに越えてしまっているというのが、ギデンスの固有の現代把握なのである。

3-2 社会理論と情報化

ポストモダン論争に関わらせて、いくつかの主要な現代社会学理論の位置付けを見てきたが、その理論化の前提的要件や理論的構成の因子ともなっているのがコミュニケーション、言語、情報などであることが注目されよう。ここでは社会理論構築との関連に限って、

この点に触れておく。

ハーバーマスの提示した理論図式に対する各論者の批判をみることによって、彼ら、ルーマン、リオタール、ギデンスらの理論的立脚点が明らかとなったが、ハーバーマス自身もまた彼なりに近代思考図式の超克をめざして、その理論化の作業に着手したのであった。そもそも70年代の「意識論」から「言語論」への転回がなされた背景は、近代の意識哲学に基づく「合理性」概念の限界、すなわち孤立したモナドとしての個人主体による客観世界の認識と支配の道具である「理性」観の限界を突破せんとする志向にあった。そのために彼は普遍的語用論をめざすコミュニケーション行為の合理的基礎付けに着手したのである。その点、ハーバーマスの理論化の企ては近代思考図式の限界を自覚したうえで、社会を（伝統的マルクス主義とは異なって）コミュニケーション的相互理解によって基礎づけられるものと再規定しえたのであった。これが近代的な自立した理性的個人主体像の解体と「情報化」の進展といった現代化の趨勢に対応した理論的再構成の試みであることは明らかであろう。

しかしながら、「システム／生活世界」といった二項図式（明らかに「ゲマイン／ゲゼル」の伝統的枠組みの変種でしかない）へと、コミュニケーション論的に再構成された社会イメージを閉じ込めてしまうことによって、ハーバーマスの企ては「生活世界」に限定された合理性の擁護へと後退してしまったといえよう。

これに対して、ルーマンの場合、そもそも現実システムはシステムの選択的働きかけ＝意味によって成り立つとされており、システムの存続のための自己産出、自己更新のメカニズムこそコミュニケーションにほかならない。そこでコミュニケーションを実現するうえでのいくつかの障害、すなわち理解と伝達、そしてコミュニケーションの成功を妨害する要因を克服し、除去する機制がコミュニケーション・メディアとされる。したがって、ハーバーマスのような言語的理解と生活世界の特権化は認められず、理解のための言語、伝達のための文字、印刷、電子メディア、そしてコミュニケーションの実現のための貨幣、権力などの象徴的メディアの相互的関連に基づいて社会システムの存続が図られることになる。社会進化を複雑性の増大とするルーマンのシステム論にとって、現代の中心を欠いた機能的に分化した社会は、ますます増大する複雑性をメディアの発展を通じて縮減するほかないことになる。これがネットワーク化されたマルチメディアによって再構成されようとしている近未来的な情報社会に対応するものであることは明らかであろう。

そして、ルーマンがシステムティックに描き出す現代の高度情報化を文化論、象徴論的位相において、ペシミスティックに描写するのがボードリヤールである。未開社会の社会形成原理を贈与＝象徴交換に見いだしたボードリヤールは、19世紀の産業社会化を「象徴交換の死」に至る「第一の革命」とし、ついで20世紀の現代をポストモデルニテとしての「第二の革命」と規定していた。つまり、モダンにおける社会的交換がなお「表象」され

る実在世界への信仰に支えられたものであったのに対して、オリジナルなきコピー、シミュレーションによって構成されたハイパーリアルな世界こそ、ポストモダンの現実なのである。このあらゆる照合系、準拠点を失った過剰な情報生産の時代が私たちの現在なのである。だが、ボードリヤールにとって、こうした事態は「社会的なるもの」と「歴史」の死を意味する以外のなにものでもない。そこには新たなポストモダンの地平に立つ社会イメージは見当たらないのである⁽¹⁶⁾。それは、文化論のレベルでの分析に終始しつつ、「社会的なるもの」の原像を（未開社会の「社会契約」－サーリンズである）「象徴交換」と近代の「社会契約」として保持するボードリヤールの理論化に内在する限界でもある。そして、ボードリヤールにおける社会理論上の不備を、緻密な実証的作業として補完しようとしているのがブルデューである。彼が直接携わっている課題は、ポストモダン風の情報化ではない。しかしながら、彼が言語という象徴資本に基づく象徴交換のエコノミーを介して、象徴権力の生産と再生産を明らかにする時、それは社会的中心性の生成のメカニズムを解明することになり、その理論化の地平のポストモダン性を表明するものである⁽¹⁷⁾。

ブルデューは、フーコーによるディスクリブル的実践の編成に伴う権力の微分的解体に対して、その積分的再構築をめざしているといえる。日常的なコミュニケーションの実践であるディスクリブルは、言語学的な意味での言語（ラングであれ、パロールであれ）とは異なり、それ自体社会的実践（プラチック）として、政治的、経済的、文化的な「場」において独自の「編成」を実現するとされる。フーコーは、そうしたディスクリブルの分析のための単位として言表（énoncé）を取り上げ、その非言語学的な社会的相関項（主体、制度、空間など）との関連から、独自に編成される場合に作用する諸力をつきとめようとした。ブルデューは日常的な慣習的実践（プラチック）としての「語り」が、一方では「語り方」として社会的、歴史的のみならず、「身体的」にいかにか「構造化」され（＝ハビトゥスとしての言語）つつ、他方ではそれが言語市場（学校のような）における象徴資本の運動としていかなる象徴的権力関係を「構造化」するに至るかを再構成しようとする。ブルデューはこれを「言語ハビトゥス＋言語市場＝言語表現・ディスクリブル」と定式化した。いわば身体化された言語的ハビトゥスからの象徴的中心の形成過程の解明が、彼の実際になし遂げた課題であるが、ポストモダンのディスクリブル編成から、いかなる社会像が構造的に再構築されてくるかという、現代社会理論にとって最も緊急かつ重大な課題の解決にとって彼の提示する方法は極めて注目に値するものであろう。

4 小 括－結びにかえて－

現代の社会学理論のあり方をめぐって、その「パラダイム」転換の意味から、高度情報化との関わりをいたるまで、足早に素描してきた。むろん、この小論はそれらの関連について積極的な解明をめざすものではなく、今日の社会理論に迫られているさまざまな問題

点の所在をつきとめるための「見取り図」を提示しようとするものである。私たちの社会と生活を構成する『知』のありかたに、今後かなり急激かつ大規模な変化が訪れようとしている。こうした『知』の変動を自らの理論化の足場としつつ、したがって《再帰的》に『知』の実態をきわめようとするのが社会理論の課題なのであるが、この変動とその行方はいうまでもなく従来の社会理論の枠組みと射程から大きくはみ出すものである。

ハーバースからブルデューに至るさまざまな現代の社会理論は、そのことをそれぞれ自覚したうえで、理論的革新を目指してきている。しかしながら、その革新にはらまれた意味を解き明かし、評価するためには、今日の『知』の変動を把握しうるだけの受け皿が必要なのである。その受け皿はおそらく自然像の転換(ポストモダン科学の自然像が「新」有機体論的なものへと収斂しつつあるのは確かであるが)、自然と人間との関係の転換(西欧キリスト教に源泉を持つ「支配」の関係からの離脱)、そして言うまでもなく、《社会的なるもの》に関するイメージの転換(脱中心化的な社会イメージ)などを鳥瞰しうるものでなければならない。この小論が一見荒唐無稽な議論の広がりを見せたとすれば、それは筆者の筆力のためばかりではないことを弁解がましく言い添えておく。

註

- (1) Poster, M., *The Mode of Information*, 1990. 室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店, 1991
- (2) 同前 24頁。
- (3) 例えば、次のような指摘がある。「……情報ハイウェイのもつ潜在的なリアリティ生成能力はこれまでのメディアよりはるかに強い。何しろアクセスできる情報のスケールが桁違いなのだ。単に電子図書館を使えるとか、テレビ会議ができるとかいったレベルには留まらないのである。困ったことに、情報ハイウェイを疾駆するマルチメディア情報によってどういうリアリティの変容がおきるのか、予想を立てるのはまことに難しい。」(西垣通『マルチメディア』岩波書店, 1994, 111頁。)
- (4) Baudrillard, J., *Simulacres et Simulation*, 1981. 竹原あき子訳『シミュラークルとシミュレーション』法政大学出版局, 1984, 199頁。
- (5) Melucci, A., *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, ed. by John Keane and Paul Mier, 1989. 永易浩一, 山之内靖訳「民主主義再考」(岩波講座『社会科学の方法』II所収, 1993。)
- (6) 前掲, ポスター 25頁。
- (7) 今村仁司『現代思想の基礎理論』講談社学術文庫, 1992, 54頁。
- (8) Liotard, J. F., *La condition postmoderne*, 1979. 小林康夫訳『ポストモダンの条件』風の薔薇, 1986, 8頁。
- (9) 同前 11頁。
- (10) ポストモダン科学の枠組みから社会システムの説明を試みようとする代表的な例によれば、「ここでは動物の世界の高度に特殊化された競争システムは崩れ、かわりに多面的な能力をもつ各個人間の複雑な相互作用が重要な役割を演ずるようになる。さらに、より多様で複雑なコミュニケーションのメカニズムも存在する。人間社会の複雑な特徴の形成には、物理的エネルギーの交換に加えて、社会的、精神的エネルギーとでも呼ぶべきものの交換が関与する。そのうえ、……自省の能力が多

くの現象を逆転させてしまう。とは言え、人間世界に出現する多くの非線型現象を記述していくと、物理的な非線型非平衡システムの進化とのあまりの類似に驚くのも事実である」(Jantsch, E., *The Self-Organizing Universe*, 1979. 芹沢高志, 内田美恵訳『自己組織化する宇宙』工作舎, 1986, 150頁。)

- (11) 今田高俊「社会の構成：意味と自己組織性」(厚東洋輔他編『社会理論の新領域』, 東京大学出版会, 1993. 所収) 16-7頁。
- (12) アドルノ, ホルクハイマーにとって, 啓蒙は自らの進化の結果, 必然的に人間学的な「野蛮状態」へと導かれる。「人類の熟練と知識とは分業によって分化してきたが, その人類は同時に, 人間学的には, より原始的な段階へと押し戻される。なぜなら支配の持続は, 生活が技術によって楽になってくる一方, より強い抑圧によって本能の硬直を惹き起すからである。想像力は萎縮する。個々人が社会やその物質的生産から取り残されているということが禍いのもとなのではない。……それとは逆に, 進歩の力への適応の中には, 権力の進歩が含まれており, その都度ふたたび退化への営みが含まれている。つまりその退化は, 不成功に終わった進歩なのではなく, まさしく成功した進歩こそが, じつは進歩の反対であることの証拠になる。止まることを知らない進歩のもたらす呪いは, 止まることを知らない退歩である」(Horkheimer, M und Adorno, Th., *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, 1947. 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店, 1990, 46頁)。
- (13) Habermas, J., *Die Moderne: ein unvollendetes Projekt*, in *Kleine politische Schriften I-IV*, 1981. 三島憲一訳「近代-未完成のプロジェクト」『思想』No.696, 1982, 6月号所収, 97頁。
- (14) 前掲, リオタール, 105-6頁。
- (15) Giddens, A., *The Consequences of Modernity*, 1990. 松尾精文, 小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房, 1993, 56頁。
- (16) 前掲, ポスター, 124頁参照。
- (17) ラッシュはブルデューの議論のうちに暗黙に含まれているモダン/ポストモダン論争への含蓄に焦点を当てている。彼によれば「ブルデューの概念枠組みそのものを形作っている権力と知に関する仮定は, 彼をして限りなくフーコーや, 理論的スペクトルについてのポストモダンの限界に近づける」(Lash, S., *Sociology of Postmodernism*, 1990, p. 238.) ものとされる。